

ACT NEWS

エー・シー・ティー ニュース

こんにちは、ACTニュース編集部です。アレヨアレヨと今年度最終号となりました。
今年も一年間、お世話になりました（年末の挨拶みたいですね）。
ということで、今年度最後のACTニュースです。ご一読ください。

ACT NEWS 第3号 令和2年3月発行 発行元：湯河原町教育委員会・特定非営利活動法人 まなびとくらし

ACT GALLERY

今年最後なので、写真大盛りで。



まわりつづけよう



2020年1月28日(火)の教育支援教室のみなさんと。

「特に意味がないように思えることでも、やってみよう」をテーマに、ゴッドアイと呼ばれているインディアン伝統的なお守りを作りました。十字にした割り箸に毛糸をひっかけ続ける、編み物のような作業です。何色をどのくらい使うか、大きさはどうするか毛糸の隙間はどの程度にするか、などなど。シンプルな作業なので、プロセスのちょっとした違いで出来栄が大きく変わっていきます。作業をしながらわかることもあるので、いろんなことを試しながら工夫できる。特に考えずに手を動かし続けていたら、誰も想像していなかったものが出来上がって、本人もみんなも驚いたり、よろこんだり。中には、もはやゴッドアイという形にとらわれない、職人芸のような逸品に仕上がったものもありました。一見無意味なことをやり続けていると、今までとは違う発想が生まれたり、意外な才能が開花することもありたりするので、おもしろいです。

対話ってなんだろう

みなさんは「ロールプレイ」という言葉を知っていますか？ロールプレイングゲーム（RPGとも呼ばれていますね）の「Role play」です。「Role」は「役・役割」、「Play」は「演じる・遊ぶ」という意味があり、つまり「役割を演じる」というような意味になります。今回は二人一組になって対話型のロールプレイをしてみようというワーク。ここでは、「話し手役」「聞き手役」が基本になるわけですが、「こんな風に話してください」「こんな風に聞いてください」といった指示をこちらが出します。詳細は省きますが、聞き手役への指示がちょっと厄介なのです。また、このワークは自分への指示は知らされますが、相手への指示は知らされないの、話全体がどう展開するのかわからないというところがミソになっています。「台本は渡されるけど、自分のセリフしか書いてないので、全体がどういう話なのかかわからない」という感じです。その上で、役を演じないといけないので、頭も勇気も使う難しいワークになっています。

なぜ、みなさんにそんな挑戦してもらおうのかというと、「擬似的な失敗体験」、つまり「うまくいかない体験」をしてもらうためです。また、上手く話せるようになる、伝えられるようになるという話し手のスキルを学ぶのではなく、「おしゃべりって、聞いてくれる人がいてナンボだよな」という当たり前のことに注目して、コミュニケーションというものを、聞き手という存在からあらためて見つめてみる機会にしたいと考えています。

ワーク後に感想を尋ねると「イヤだった」と、言ってくれた人がいました。やっぱり、不快な気持ちには「モヤモヤ」がつきものです。そういった「心の揺れ」を彼は感じたのだと思います。きっと、そういう「揺れた瞬間」を心に記憶して、忘れたり思い出したりしながら、私たちは今日を過ごしているんでしょうね。



2020年1月30日(木)の1年生たちと。

ダンボールハウス ミニ!



2020年2月7日(金) 8組のみなさんと。

8組では毎年最後にダンボールハウスを作ります。秋の3年生のワークと同じことをするのですが、人数が少ない分、小さめのハウスを作るので、タイトルを「ダンボールハウスミニ」と名づけました。

今年は、1年生たちが壁などをひたすら作り、3年生はそれぞれに家具や小部屋などを作り込んでいました。

仮説と仮設

ペーパータワーをたてよう!

2年生最後のワークは、グループでA4用紙40枚を使い、高さ180cm以上の構造物を作ります。そしてタイトルの通り「こうしたらできるんじゃないか」と仮説を立て、「とりあえずやってみよう」と仮設する。これをひたすら繰り返していきます。

今年の2年生は「他のグループのやり方は真似したくない!」と、自分たちのやり方を見つけ出そうとする人が多かったです。先生たちとのシェアの場面でも「普段も、自分のやり方にこだわる生徒がたくさんいる。オリジナリティを大事にする生徒が多い学年なんだなとあらためて思った」といった話がありました。

今回のように達成したい目標がある時、成功している人の真似をすることは意味がありますし、何より効率が良いです。でもそうせずに、自分のやり方で試してみようとするのは立派な姿勢ですし、何よりおもしろいことだと思います。時にそれは、周りから見るとずいぶん遠回りなことに見えるかもしれない。でも、試してみないとわからないし、わかるのはそれからでいい。そう思います。それが本人にとっての「絶対最短距離」で、「そうしないとわからない」という道のりなんだと思うのです。見ている方はドキドキしますけど笑。

壁は一年生たちのおかげでみるみるそびえ立ち…手が届かないんじゃないだろうかというほどの高さになりました。そこで、様子を見ていた大人たち数人がダンボールを繋ぎ合わせて大きな一枚の屋根や柱(にできそうな素材)を作り、何も言わずにみんなのところへポン!と放り込んで、場面は急展開です。まっすぐ立ってた壁はグニャリと曲がるし、屋根は両手で持ち上げてないと崩れる。個人作業をしていた人たちも集まってきて、なんとか支えながら形にしていきました。やっぱり、ピンチになるとみんなの手が自然と伸びてきますね。こういう時は、いつも引き出しにしまわれている力が自然にとびだす場面でもあるので、その人の意外な一面が見られることもよくあります。先生たちとのシェアの場面でも「あのコがあんなことできるなんて驚いた」など、いろんな発見につながります。そう、ピンチを作るのも私たちの仕事です。

また、生徒さんの感想の中に、6年生で実施した「マシュマロタワー」を思い出したという声が複数あり、「あの時より〜だった」とふり返ってくれていた人もいました。こうやって繋がっていくものなんですね。

このワークの最中は「手を動かしてから考えよう、うまくいかない時は別のやり方で試そう、崩れたらやり直そう」と言うような声かけをしながら、トライしてエラーするサイクルのスピードを上げていくムードをつくるようにしています。そうしているうちに、グループ内では思いがけない人から思いがけないアイデアが出てきたり、決めたわけでもないのに役割ができていたり。そして、別のグループが最後の一手にトライする場面では、台の上に立っている人をみんなハラハラしながら見つめ、成功したら「おおおお!」と湧き、崩れ落ちたら「ああああ!」とどよめく。こういうことが自然と起こるのが、このワークの良いところです。



2020年2月12日(水)の2年生たちと。

ACT GALLERY



みんな、今年もありがとうございました。